
ライフジャケット

栗原峰幸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライフジャケット

【Nコード】

N4120I

【作者名】

栗原峰幸

【あらすじ】

高杉の釣友、宮本が急死した。高杉は宮本の妻から遺品としてライフジャケットをもらう。そして、宮本の妻と不倫の関係に……。高杉はある日、遠征釣りへ出掛ける。生憎の時化模様で船は難破。宮本のライフジャケットに救われる。そこで高杉は宮本の声を聞く。

その日の午後の病室には、強い日差しが差し込んでいた。さすが夏を思わせる日差しの強さである。

宮本栄一は静かに横たわっていた。点滴のチューブを虚ろな瞳で見つめている。病室内はクーラーも効いており、暑くはなかった。

「よう、宮本」

汗を拭きながら病室に入ってきたのは、宮本の同僚であり、友人でもある高杉健一であった。宮本が痩せているのに対し、高杉はやや小太りだ。会社ではいつもデコボココンビなどと言われている。

「おお、高杉、すまん」

「いいってことよ。それより退屈だと思っとな」

高杉が宮本のベッドサイドに雑誌を二冊放った。それは沖釣りの雑誌だ。宮本も高杉も沖釣りが趣味だった。その趣味を通じて親交を深めていたのだ。

「いやー、それにしても外は暑いな。三十度以上はあるぞ。ここは天国だ」

高杉の額からは玉のような汗が、まだダラダラと流れ出している。病院の中は程よく空調が効いていた。

「馬鹿言え、俺にとってここは地獄だ」

そう言いながら宮本は高杉が差し入れてくれた雑誌に手を伸ばした。沖釣り雑誌の最新刊だ。それをパラパラと捲る。

「ああ、船に乗って釣りに行きてえ！」

「退院したら存分に行こうぜ」

「何で俺が胃がんなんかなるんだよ」

そう、宮本の病名は胃がんだった。社内の健康診断で指摘を受け、精密検査をしたところ、胃がんが発見されたのだ。幸いなことに、他の臓器への転移は認められなかったため、胃の三分の二を切除しただけで済んだ。

「まあ、愚痴を言っな。転移していなかっただけでも良かったじゃないか」

「最近、点滴のチューブがクッションゴムに見えるんだ」

「そりゃ、重症だな。退院したらマダイかワラサにでも行くか？」

高杉が思わず苦笑を漏らした。クッションゴムとは釣具のひとつで、糸切れを防ぐゴムのことである。透明なものはそれこそ点滴のチューブにそっくりだ。

「秋になる前には退院するさ。先生も退院がもう近いと言っている。そっちなあ、退院後の初釣りは……、ボウズも嫌だし、シロギスでも行くか？」

「ふふふ、随分気弱じゃないか。それに胃が弱いんじゃないや。天ぷらは食えないだろう」

「刺身サイズが釣れてくれればな。それと干物にしてもいい。天ぷらは家内や子どもに任せるよ。ところで高杉は行っているのか？」

「ああ、先週もカサゴに行ってきた。観音崎沖でいい型が随分出たぞ」

高杉が実際に釣れた魚のサイズを手で表す。それは四十センチをはるかに越えるサイズだ。宮本が「くくつ」と笑った。釣り人の自慢話は手を縛れとの話があるからだ。

「まあ、退院が近いなら心配は無用だな。シロギス釣り、楽しみにしてるぜ」

「あのキunksyunした引きがたまらないんだよなあ。最近は胴付き仕掛けが流行っているらしいな」

「俺も試したが、東京湾では結構釣れる。それに引きがいいんだな。魚の感触がダイレクトに伝わってき。ピンギスでも大物かと間違えるぜ」

「早く行きてえなあ……」

「もう少しの辛抱さ。それより、今年は銭洲の遠征に行きたくてな」

「銭洲かあ……」

「シマアジやカンパチの楽園だぜ」

「竿がギョングョン引き込まれて、ドラグが鳴って……。くーっ、たまんねえ！」

こうして二人の会話は夕食が配膳されるまで続いた。

高杉は宮本の見舞いの帰り、馴染みの居酒屋でホッピーを煽った。ビールよりホッピーを好む高杉である。アナゴの白焼きが黒板に書かれていたので注文した。

(そう言えば、今年は夜アナゴに行っていないな……)

夜アナゴとはその名の通り、夜に船から釣るアナゴのことで、趣があり風情のある釣りである。餌を小突く誘いと合わせのタイムイングが難しく、熱中するファンは多い。高杉はあまり夜アナゴの経験はなく、夜釣りでいくと、夜メバルの方がどちらかというところ好きだった。

「先日はカサゴをありがとうございました」

居酒屋のマスターが包丁を握りながら、片手間に挨拶をしてきた。高杉は大漁だった時、この店にお裾分けしているのだ。店はそれを安価で客に提供したりするものだから、非常に喜ばれるのである。

「結構デカいのも混ざっていたでしょう？」

「ええ、刺身にさせていただきました。お客様も大喜びで」

「そりゃあ、何よりだ。また釣ってきますよ」

「ありがとうございます。また是非お願い致しますよ」

マスターが愛想の良い笑顔を高杉に向けた。高杉は気分良く酒が進んだ。ホッピーの泡が何とも心地よかった。どことなく香る麦焼酎のラムネのような匂いが、高杉を酔わせた。

高杉がちょうどほろ酔い気分になった頃、胸元にしまった携帯電話が鳴った。高杉は「無粋な奴だ」と思いながら、渋々電話に出た。それは聞き慣れた妻、信子の声だったが、空気は切迫していた。

「あなた、大変よ。宮本さんが亡くなったらしいの」

「何だつて、そんな馬鹿な！」

高杉は一気に酔いが醒めていくのを感じた。実際にはアルコール

は体内に蓄積されているのだろうが、酔ってはいられなかった。

「そんな馬鹿なことがあるか。さっきまで元気だったんだぞ。それに、もうじき退院だって言っていたんだ！」

「兎も角、彼の奥さんから急な知らせなの。急いで病院へ行っただけ！」

「わかった！」

高杉は勘定を済ますと、足早に宮本の入院している病院へと引き返した。

病院へは地下鉄を乗り継いで行くのだが、暗く長いトンネルが、気が遠くなるほど長く感じる高杉であった。

病院の表玄関は既に閉まっており、裏口の通用門から入る。高杉は自分が少し酒臭いことを恥じながら、守衛の横を抜けていった。

宮本は既に霊安室にいた。顔に白い布切れを被せられ、横たわっていた。そこにしがみつくように泣き崩れる二人の息子。宮本の妻は息子たちをなだめるだけで精一杯の様子だ。

「昼間は元気だったのに……。奥さん、これはどういうことなんですか？」

宮本の妻はハンカチで目頭を押さえながら、高杉の方へ向き直った。

「先生の話では肺梗塞を起こして、即死状態だったって……」

そう言うと、宮本の妻は急に泣き崩れた。息子たちを支えるだけの力も今はなかった。己の悲しみに抗うことができなかったのである。

「肺梗塞……」

高杉が唸るように呟いた。

高杉が宮本の妻、恵美に呼ばれたのは、四十九日が終わってからだった。宮本の家へ招かれたのだ。

高杉はこの間、社内で宮本の遺児のために育英募金の幹事を申し出た。それは微力ではあったが、恵美にとっては有難い好意であっ

た。

「この度は色々とお世話になりました……。何とお礼を申したらよいのやら」

恵美が丁寧な頭を下げた。

「いえ、ほんの気持ち程度ですよ。あまりお力になれなくてすみません」

高杉がお茶を啜った。高杉は心配だった。これから宮本の家族が経済的に遣り繰りできるのかどうかということが。おそらく高杉はそんな表情をしていたのだろう。

「私も働き始めたんです。パートですけど」

恵美が呟いた。その表情は憂いを帯びていた。

「そうですか。やはり経済的に苦しいですね」

「ええ……。子ども二人を養うとなると生命保険だけでは……」

「失礼ですけど、奥さんは働いた経験は？」

「ずっと専業主婦でした……」

恵美が唇を噛み締めた。高杉はおそらく職場で嫌な思いを恵美がしているのだろうと推測する。

「でも、覚悟は出来ているんです」

恵美が高杉の目を見据えて言った。高杉は思う。母として遅く成長していかねければ生きていけない立場に置かれている恵美を応援してやりたいと。

高杉が恵美に会った機会は、今までそれほど多くはない。互いに同僚、そして釣り友達として接し、その家族とまでは付き合いがなかった。恵美とは宮本が死ぬまで二、三回、釣りの帰りに挨拶を交わした程度だった。

「実は高杉さんに貰ってもらいたい物があるんです」

恵美がそつと立ち上がった。

「貰ってもらいたい物？」

「主人の釣具ですわ」

「ああ、なるほど」

恵美は高杉を案内した。

そこは宮本の趣味部屋ともいう部屋で、パソコンや釣具が置かれていた。

「ここ、今まで女人禁制だったんです」

そう言いながら、この日初めて恵美が笑った。

「しかし、羨ましいですな。こんな趣味部屋まで持てて」

「主人の父が資産家でしたから」
「なるほど」

高杉と宮本は同期入社となる。だが、高杉は主任で、宮本は平社員だ。それでもお互いに釣り友達として、肩書きの違いを気にしたことはなかった。実際、勤務中にも釣りの話題をよくして、デコボココンビなどと周囲から呼ばれていたものである。宮本には出世欲がなく、いつものんびりと仕事をしているように、高杉には感じられた。それは、親の資産に裏打ちされたものだったのかもしれない。高杉は改めて部屋の中を見回す。壁には整然と立て掛けられた釣竿の数々。お洒落なサイドボードにはリールが飾られている。何段にも重ねられたカラーボックスにはぎっしりと釣具が詰め込まれていた。

「これを全部、私に……？」

「ええ、私には使い道がないので」

高杉は腕組みをした。宮本の釣竿、リール、どれをとっても一流メーカーの一流品で、正直なところ、喉から手が出るほど欲しくなるほどの品だった。しかし、だからこそ貰うのに躊躇いが生じるというものだ。

「これは、どれも一流品ですね。一生物ですよ」

「私が持っていて宝の持ち腐れです」

「お子さんが大きくなって使ってもよいでしょう？」

「果たして釣り、まして船の釣りなんかやるかどうか……。教えて下さる方もいませんし……」

「そのうち私が連れて行ってあげますよ。その時にこの道具を使わ

せてあげて下さい」

「まあ、息子たちの面倒もみて下さるんですか？」

「宮本の忘れ形見に最高の幸せを教えてあげたいんですよ。中国の諺にあるんです。『一時間幸せになりたかったら、酒を飲みなさい。三日間幸せになりたかったら、結婚しなさい。八日間幸せになりたかったら、豚を殺して食いなさい。一生幸せになりたかったら、釣りを覚えなさい』ってね」

そう言つて、高杉は壁に掛かっているライフジャケットに手を伸ばした。普段はコンパクトだが、落水すると自動膨張する最新式のライフジャケットである。

「これだけ頂こうかな」

「まあ、それだけでよろしいんですの？」

高杉は今までライフジャケットを着る習慣がなかったし、持つてもいかなかった。実際、船が沈没したり、船から落水したりすることはなく、必要を感じていなかったのである。

それに対し宮本は、いつもライフジャケットを着用し、落水に備えていた。そんな彼が病気で先に死んでしまふとは皮肉な話である。「これだけで十分ですよ。恥ずかしい話、今まで私はライフジャケットを着たことがないんです。これからはこれをあいつだと思って、ちゃんと着ます」

「嬉しいです。死んだ主人もきつと草葉の陰で喜ぶでしょう」

恵美が微笑んだ。高杉はドキリとした。改めて近くでその微笑を見ると、恵美はなかなか美しいではないか。だが、その不謹慎で不埒な妄想をすぐに掻き消し、高杉はライフジャケットに目を遣った。

「じゃあ、私はこれで……」

「ちょっと待って下さい」

恵美が高杉の手を掴んだ。

「もう一つ、貰ってもらいたいものがあるんです」

そう言い、恵美は身体を高杉に摺り寄せてくる。

「奥さん、冗談は止めて下さい……」

「冗談でこんなことが出来まして？」

恵美は高杉の手を自分の胸元へと誘う。高杉の手が震えていた。

「宮本が見てますよ」

「四十九日は終わったのよ。あの人はあの世へ旅立ったわ。私、あの人が死んでから寂しくて……」

「奥さん……」

震えていた高杉の掌が、恵美の胸を鷲掴みにした。

「私、元々男の人なしでは生きていけないの……」

唇と唇が重なる。それはキスなどという生易しい表現では表せない、濃厚な接吻だった。

高杉は背徳の接吻と肉の質感に、得も言われぬ興奮を覚えていた。それは中国の諺には当てはまらない、一瞬で消えてしまう花火のごとく、瞬くような快樂であった。

高杉は会社で釣りクラブを立ち上げた。亡くなった宮本の名を取り、「宮本沖釣り愛好会」と命名した。元々社内では釣り人口が高かったのだが、沖釣りとなるとやはり敷居は高い。若い連中はブラツクバスを追い掛け回しているし、年配者にはヘラブナの愛好家も多かった。そんな者たちを説得し、船に乗せた高杉の努力は情熱に裏打ちされたものと言えよう。

無事に第一回目の釣行であるシロギス釣りを終えて、高杉は一路、宮本の家を目指した。実は釣りクラブの会費や乗船料に、宮本の子どもの育英基金を上乘せしているのだ。それは微々たる金銭ではあるが、会員の好意として宮本の妻にしっかりと送り届けなければならない。

宮本の妻、恵美は恭しく育英基金を受け取った。

「今度の定例会でも届けますよ」

「本当に貴方には、こんなにさせていただいて……」

「それは会員の皆さんに言ってください。それと……」

「それと？」

高杉がクーラーバッグからフリーザーバッグに入った魚を取り出す。

「シロギスです。宮本とシロギス釣りに行こうって言っていたんです。天ぷらにでもして仏前に供えてやってください」

「まあ」

恵美の顔がほころぶ。

「じゃあ、今日はこれで」

「待って！」

恵美が高杉の袖を引っ張った。その瞳は女の瞳になっていた。真剣な瞳だった。高杉は家に帰って、魚を捌かねばと思っていた。いつも釣りからは真っ直ぐに帰宅している。だがこの時、恵美の誘惑を振り解くだけの心の強さを、高杉は持ち合わせていなかった。

「それをお脱ぎになって」

高杉が家上がったところで、恵美が言った。その言葉に高杉はライフジャケットを着たままであることに気付いた。

これから行われる行為、それは不倫以外の何物でもない。そんな背徳行為を宮本の分身であるライフジャケットに見せ付けるわけにはいかなかった。

その日、高杉が帰宅すると子どもはもちろんのこと、妻の信子は先に寝ていた。帰宅したのが二十五時位だったから、当然といえば当然であった。家に帰って捌くはずだったシロギスはすべて宮本の家で捌き、彼の妻へのお土産にした。

高杉と妻とは既に寝室は別であった。夫婦の営みも、ここ数年行われてはいない。

食卓に高杉の分の夕飯は残されてはいなかった。

高杉は「はあ」とため息を漏らすと、そのまま風呂へと向かった。

翌朝、高杉の妻も娘も不機嫌だった。高杉が「おはよう」と声を掛けても返事がない。今まで、多少の喧嘩をしたことのある家族であるが、口も利いてくれなかったのはこれが初めてあった。

「ごめん。昨日は皆で宮本の家によって遅くなっちゃったんだよ」
だが、妻は高杉の方を向こうとはしない。ただ、朝食の準備を黙々と進めている。

「お父さん、シロギス楽しみにしてろって言っていたのに」
娘の愛美がむくれ顔で言った。

「あ、ああ、ごめんな。たいして釣れなかったから、人にあげちゃったんだ」

「お陰で私たち、夕べはふりかけご飯だったのよ」
愛美は高杉を睨むようにして言った。

「釣れないわけないもんですか。いつもは五十匹、六十匹釣ってくるくせに」

妻が背を向けたまま、ボソツと呟いた。

「いや、嘘じゃないって。昨日は初心者面倒を見るのに大変で、竿を出す暇がほとんどなかったんだ」

高杉は慌てて弁解し、妻に寄り添う。だが、妻は高杉の方を向こうともしない。

「何もシロギスが食べたかって言っているんじゃないやありません！」

「遅くなってすまなかった」

「最近残業でいつも遅いじゃない。それで休日は釣り。そこでも遅くなって……。愛美や私はどうでもいいわけ？」

妻が堪えきれず、唇を噛みながら、高杉を睨んだ。高杉の心の中にグレーの帯のような霧が立ち込める。残業などはほとんどしていない。宮本の妻と密通しているのだ。グレーの霧は高杉の心臓を取り巻き、その中で真っ赤な血液が鮮明に脈打っていた。

「いや、すまなかった。なるべく早く帰れる日はそうするよ」

「馬鹿……。本当に家庭を顧みないんだから」

妻の瞳には涙が光っていた。それを見て、高杉の心は痛んだ。寝室が別だからと言って、家庭全体の環境がすこぶる悪いわけでもない。そのささやかな幸福を今、自分は壊そうとしている。そんなことを思うと心が痛むのだ。

だからと言って、恵美との関係をすぐさま清算できるほど状況は楽ではなかった。この時、高杉は家庭での平凡な幸福と、恵美とのスリリングな関係とを天秤にかけていた。

そんな家庭でのやり取りがあつて、高杉が早く帰宅する日数が増えた。ただ、遅くなる日は日付が変わつてから帰宅していた。妻には「残業をする日はトコトンする」と言い訳をしていた。早く帰宅した日は家族団欒のひとつきを過ごす。すると次第に妻の信子の機嫌も良くなつてきた。無論、残業と称する日には恵美との情事を楽しんでいたのだが。

「なあ、今度、有給休暇を貰つて遠征釣りに行きたいんだけど、いかな？」

高杉は焼酎を煽りながら、妻にそう申し出た。

「遠征つてどこまで行くの？」

「下田だよ。そこから船でだいぶ沖まで行くんだ」

高杉が思い描いていたのは銭洲と呼ばれる海域への遠征釣りだった。そこではシマアジやカンパチといった、大型高級魚が数多く釣れる。

「飛行機で飛ぶわけでもないし、プチ贅沢つてとこだ。いいだろう？」

高杉が観ていた野球を消し、せがむように言った。

「まあ、こここのところ早く帰ってきてくれる日も増えたし、いいんじゃない」

妻の信子は洗い物をしながら、サラッと言った。その言い方が少しも嫌味ではなかったところに高杉は救われた思いがした。

「ありがとう」

高杉はそつと妻に寄り添った。妻の口元が少し緩んだ。それは「しょうがないわね」とでも言いたげな笑いだった。

高杉が下田に到着したのは二十四時位だったか。周囲は寝静まっ

ていたが、港の前だけ、異様な熱気に包まれていた。銭洲遠征を志す者たちの熱気だ。出航の二時間前から遠征フリークたちは集い、紺碧の海に思いを馳せるのだ。

高杉は車から道具を降ろし、そそくさと船に積み込んだ。そして出航の時間までしばし仮眠をとる。だが、身体中にアドレナリンが駆け巡り、興奮した頭は眠りを許してはくれない。結局、出航まで高杉が眠りにつくことはなかった。

午前二時に大型船は銭洲に向けて出航した。高杉は宮本の形見であるライフジャケットをしっかりと着込み、キャビンでくつろいでいた。

下田から銭洲までは悠に四時間はかかる。それまでエアコンの効いたキャビンのベッドでくつろげるのが大型遠征船のよいところである。しかし、釣り人の大半はまだ見ぬ大物との対峙を夢見て、寝付けないようだった。高杉もその一人である。

その日、時化とまでは言わないが、波は荒かった。ベッドに横になる高杉だが、宙に浮いては、次の瞬間、奈落の底へ落とされるような感覚を幾度となく味わうことになる。中には早くも船酔いして嘔吐する者もいた。

高杉は宮本のライフジャケットをそつと撫でた。彼の妻との姦通という後ろめたさがなければ、「一緒に釣ろうな」などとライフジャケットに語りかけていただろうと思う。だがこの時、高杉が宮本に語りかけることはなかったのである。高杉は苦しそうに寝返りを打った。船は荒波に揉まれながら、一路銭洲を目指している。寝付けない高杉はキャビンから出て、ふとまだ暗い海を見た。それは混沌の色を湛えていた。

船のエンジン音が幾分静かになり、減速したのは夜が白みかけてからであった。船長から「ポイントに着きましたので、準備をお願いします」とアナウンスがあり、皆一斉にキャビンから燻された穴熊のように出る。そして、竿を取り出し、仕掛けをセットし、釣りの準備に余念がない。無論、高杉も例外ではない。

波は依然、高かった。船は岩礁の周囲を何度か旋回して停まった。「はい、どうぞ。水深四十メートル。底から五、六メートルにシマアジの反応が出ています」

船長のアナウンスを皮切りに、釣り人たちは一斉にビシにコマセを詰め始めた。そして、仕掛けを投入する。高杉は予報で波があることを予想していたため、三メートルの長い竿を持参し、その長さでウネリをかわそうとしていた。

皆、竿をシャクリ上げ、コマセを撒きながら魚を誘う。大きな波が幾度となく襲来し、船を大きく揺らした。高杉はふと思った。

（もしかしたら、宮本のライフジャケットを使うことになるかもしれない……）

魚からの返事はすぐに来た。大艦（船尾）の釣り人がシマアジを釣り上げたのだ。コマセに魚が反応し始めたのだろう、それから船のあちらこちらで竿が曲がるようになった。だが、折からのウネリで取り込みには皆、一苦労しているようだ。

高杉の手元にもググググンという生命感溢れるアタリが到来した。同時に竿がひったくられる。高杉は電動リールの巻上スイッチを入れ、一気に魚を抜き上げようとしていた。水面下一メートルで銀鱗が光った。朝の太陽がシマアジの身体に反射して眩しい。

船の釣りは共同作業である。隣の釣り人がタモ網で魚を掬ってくれた。甲板の上上がったのは三キロ以上もある立派なシマアジだった。高杉はこんなシマアジを釣りたくて銭洲まで来たのだ。

「波が高いけど愉快ですな」

隣の釣り人が高杉に語りかけてきた。

「いや、これが釣りたくて銭洲まで遠征に来たんですよ」

「今が時合みたいですから、どんどん釣りましょう」

高杉はシマアジをすばやく神経絞めになると、大きなクーラーボックスに放り込んだ。そして、次の仕掛け投入の準備に入る。

午前十時。この時点で高杉は十枚のシマアジを釣り上げていた。

これだけでも十分な釣果なのだが、更に釣果を伸ばしたいと思うのが釣り人の性である。

だがこの時、急に風向きが変わった。次の瞬間、恐ろしいほどの突風が船を襲ったのだ。船は大きく揺れ、ミヨシ（船首）付近の釣り人の中には転倒する者もいた。

「これはまずい。時間より早いけど、これで揚がります。直ぐに道具を片付けて」

船長のアナウンスに文句を言う者もいた。何せ遠征釣りだけに料金も高い。それで早く揚がられたのでは損をした気分になるというのはわからないでもない。だが、船の上で船長の権限は絶対だ。

「バカヤロー、死にてえのか！」

その船長の一喝で、船は一路、下田に引き返すこととなった。釣り人たちは渋々、キャビンへと引き揚げていった。すると、船はフルスロットルで駆け出した。

波は以前にも増して高くなっているようだった。ベッドに横になってなどいらねぬ。どこかにしがみ付いていなければ、身体が宙に浮いてしまうのだ。それでも、船は空を飛んだかと思うと、急に硬い水面へと叩きつけられた。その衝撃たるや凄まじいものであった。「しっかり捕まってる！」

船長が叫んだ。どうやら海況はすこぶる悪いようだ。大型遠征船が木の葉のように弄ばれているのが、高杉にもわかった。

だが、フルスロットルで駆けていた船のエンジンが急に、穏やかになると、減速し、停止してしまった。

「エンジントラブルです。今、海上保安庁に遭難信号を出しました。救助を要請します」

船長のアナウンスに一同がどよめく。動揺の色が走った。高杉が状況を確認しようとキャビンから出ると、「危ない、出るな！」と船長に一喝された。

船は揉みくちやにされていた。波の高さは四から五メートルはあるだろうか。そんな波が容赦なく船を襲うのだ。二十メートルを越

える大型釣り船とは言え、いつまで耐えられるかは時間の問題だった。

それはとてつもなく大きな波だった。船を見下ろすような、そうまるでビルのような波が船に迫り、呑み込んだのだ。

「うわーっ！」

誰もが一齐に叫んだ。高杉には一瞬、何が起こったのかさえわからなかった。だが、次の瞬間には天井と床が逆さまになり、一齐に海水が浸入してきたのだ。

高杉は夢中で海面を目指した。いや、本能の赴くままに息が出来る場所を求めていたに過ぎない。だから、船の転覆から水面に顔を出すまでの記憶は定かではない。

高杉が水面に浮んだ時、船は仰向けになり、船尾から徐々に沈みかけていた。

高杉はライフジャケットを見た。それは水分を感知し、膨張してしっかりと高杉を支えていた。

「宮本、助かったよ！」

高杉は思わず叫んだ。自動膨張式のライフジャケットは仰向けの姿勢で体位が保持される。高杉は海に寝そべりながら、波間を漂っていた。それは翻弄される空き缶よりも脆い存在であった。

「宮本、宮本……」

そんなうわ言を高杉は何回繰り返しただろうか。

『俺のライフジャケットが役に立って何よりだよ』

高杉はわが耳を疑った。だが、その声は確かに宮本の声だった。

「宮本、宮本なのか？」

『そうだよ、俺だよ。俺の肉体は滅んでも、魂はライフジャケットに宿っているんだ』

「おお、宮本……」

信じられるかどうかの問題ではなかった。確かにライフジャケットから宮本の声が聞こえてくるのだ。

時々、波が高杉の顔を覆い、塩辛い海水が口に入る。他の釣り人や船長がどうなったかはわからない。高い波間に遮られ、視界はすこぶる悪かった。

『もう少しで助けがくるさ。もう少しの辛抱だ』

「宮本、俺はお前の女房と……」

高杉はまだこの世界に宮本がいることに驚くと同時に、己の行動に自責の念を覚えていた。

『恵美はああいう女さ。そのうちお前にも飽きて、誰かと再婚するだろう。お前を責めたりしないよ』

「許してくれるのか？」

『許すも何も、恨んじやいない』

「すまなかつた」

高杉は泣きそうになって、ライフジャケットにすがった。

『それより、シマアジは惜しいことをしたな』

「何、命があればまた釣れるさ」

『そうだな。命があればな』

「お前のお陰で助かつたよ」

宮本は死して尚、こうして友を助けてくれているのだ。何とも劇的な再会ではないか。高杉は良い友を持ったことを誇りに思うと同時に、このライフジャケットが自分の手に渡ったことも運命であったような気がしてならなかつた。

『俺にはわかる。もう少しすれば遭難信号を聞きつけた救助のへりが来る』

「そうか……」

高杉は愛しそうにライフジャケットを摩った。

『こんな目に遭って、まだ釣りをしたいか？』

「そうだな……、釣りはやめられん。次はアジかイシモチにでもしておくか」

『当然、遠征はやめておくんだな』

「そうするよ。近場で手軽に釣れる魚にする」

『どうでもいいけど、ライフジャケットを過信するなよ』
『どういう意味だ?』

『じきに助けが来るが、最後まで気を抜くなということさ』

『ああ、わかったよ。でも、お前がいるから心強いぜ』

『そうか……』

「そういえば、いつかお前と行った伊豆のイサキも時化ていたっけなあ」

『そうだったな』

「釣れることは釣れるが、みんな船べりでバレちゃってさ」

『そんなこともあったな。懐かしいな』

遭難した時に他愛のない話でもして、励ましてくれる話し相手い
るだけでも助かるものである。高杉は宮本との会話に救われた気が
した。

どのくらいの時間が経っただろうか。高杉はくじけそうになっ
ても、宮本に励まされながら、波間を漂い続けた。

『ヘリが来たぞ』

耳を澄ますと、バラバラとヘリコプターのエンジン音がする。

「助かった!」

ヘリコプターは高杉の上を大きく旋回した。ライフジャケットに
は反射板が供えられている。上空から救助する際には、とても目立
つように出来ているのだ。

ヘリコプターは数百メートル先の釣り人を救助した。風が強く、
定位するのが難しいのだろうか、救助作業は難航しているようだ。
高杉はそんな様を見て苛立ちを隠せなかった。

『慌てるな。必ずここにも来る』

宮本が諭すように言った。その通りだった。一人の釣り人を回収
して、ヘリコプターは高杉の上空へと定位した。凄まじい風だった。
ヘリコプターから縄梯子が下ろされる。

「おーい、大丈夫かー!」

「はい！」

「よし、捕まれー！」

高杉が縄梯子に向かって泳ぐ。あと一息で縄に届くという時だった。

『俺もあと一息というところだったんだよ』

急にライフジャケットの空気が抜けた。高杉が波に吞まれた。

(了)

(後書き)

ちょっと釣りの専門用語が多かったですかね。ごめんなさい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4120i/>

ライフジャケット

2010年10月8日12時32分発行